

はじまりの夏

福島県南会津町立田島中学校

三年 大内 鈴 音

「柔道をやめたくない。」中学校最後の試合のブザーを遠くに聞きながら、私は繰り返しの心の中でそう叫んでいた。

柔道に初めて出会ったのが小学校三年生の時。最初の頃は何も分からず、かっこいい柔道着を着るのとだけがうれしくて柔道場に通っていた。しかし、練習していくうちに、練習の厳しさについていけない。そして何より人見知りで大きな声を出すことが苦手な私にとって、柔道場に行くことが苦痛になってきた。それを見た父が、「無理することはない。自分からやりたいと思うようになったら、また始めればいい。」と、励ましてくれた。

中学校に入学し、私は迷わず柔道部に入部した。「大丈夫。絶対ついて行ける。」そう信じて練習に参加していたが、ここでもやはり自分の心の弱さが出てきてしまった。毎日同じ技の練習の繰り返し。まわりの同級生は皆強く、私は投げられてばかり。体中にあざができ、思うように歩くことができない時もあった。「柔道なんて楽しくない。早く引退したい。」まわりでがんばっている仲間を冷ややかに見つめている自分がいた。何の目標も持てないまま、これからどうなっていくのだろうとぼんやり考えながら、一年半が過ぎていった。

中二の夏。初めての県大会。「始め。」対戦相手の

気迫と潔さを目の当たりにし、衝撃を受けた。監督である父から、常に言われていた言葉があった。「相手がいることに感謝し、礼を尽くして全力で励むのが、柔道だ。」と。頭では分かっていたつもりでも、今までの私はそれとは逆の行動ばかりしていた。心が全く育っていなかった。ひたむきに柔道と向き合っている仲間達をみて、「今、変わらなければ。」と強く思った瞬間だった。それからの私は、自分の思いを口に出すようになった。「どんなことがあっても絶対にあきらめない。」「時間を大切に練習する。」「体重管理をしっかりする。」「口に出してまわりの人に伝えることで、意識が高まった。毎日の練習がとてもいとおしくなった。励まし合える仲間の偉大さを感じるようになった。そして何より大嫌いな柔道が好きになっていった。

あれから一年。中学校最後の県大会が目前に迫ったある日、左膝に痛みが走った。受診の結果「半月板断裂」。もし、痛みが続けば手術の可能性もあるという医師の診断だった。しかし不思議と怖さはなかった。というより私の頭の中は県大会のことについてばいだった。その夜、家族全員が食卓を囲み私の左膝の話になった。「まずは体が大切だから、無理するんじゃないよ。」と心配そうな祖母。「昔の鈴音だったら、手術と聞いただけで泣いてたぞ。強くなったな。これも、柔道のおかげだな。」と笑顔の父。「後悔しないためにも今できることを全力でやることが一番。」とたくましい母。それぞれの声を聞きながら、あらためて家族への感謝の気持ちがあふれてきた。いつも明るく、鼻歌を歌いながら弁当作りをしてくれる母。遠征や大会には早起きして、「気をつけてね。」と優しい笑顔で、私達を乗せた車が

見えなくなるまでずっと手を振ってくれる祖母。そしていつも私の一番近くで、厳しく熱く背中を押してくれる父。柔道で悩んでいた私を、そばでずっと見守り続けてくれた家族のためにも、力の限り戦おうと心に誓った。

団体戦は完敗だった。負けた悔しさはあったが、全力を尽くした達成感を感じることができた。すがすがしい気持ちでベンチに戻ろうとした時、そばで悔し涙を流して顔を伏せている仲間の姿があった。双子の妹だった。私は、妹の泣く姿を初めて見た。何事にも真面目で努力家で、どんなに辛くても弱音を吐いたことがなかった妹。いつも仲間を、そして私を励ましてくれた妹。「りーちゃん、私いつも試合に出ると、投げられて天井ばかり見てたから、初めて畳を見続けることができた時、本当にうれしかったんだ。だから、大変なこともあるけど、これからいっしょにがんばっていこう。」初めて妹が試合に勝った時、最高の笑顔で話してくれた言葉を思い出した。かける言葉が見つからなかった。そのかわりに、私は力強く妹の背中をたたいた。

審判の「押さえて込み」の声から二十秒間、私はありったけの力でもがき続けた。個人戦の試合が終わった。そして夏は終わった。柔道から離れた今、ますます柔道が好きになっている自分がある。「柔道が続けたい」思いがどんどんふくらんでいる。それがすごくうれしい。これから続く私の人生、いろいろな節目の時にあのブザーの音を、きっと思い出すだろう。あの音は終わりではなく、これから始まる輝く未来へつながっていると信じていたい。「始め！」大きく高らかな私の声が、私の体の中で響き渡った。